

教え魔ハンター

青乃家

私は水口凪沙。教え魔ハンターだ。

今日の仕事場は平日のゴルフ練習場。この時間帯に打ちっぱなしへ来る人は少ないが、それだけに話しかけやすい空気が生まれる。ましてや、若い女の子ともなれば、なおさらだ。センター長に聞いていた女子大生が、ショートパンツ姿で現れた途端、何人かの視線が集まつた。

私は自販機横のベンチに座って目を光らせている。マスクをしてキャップを深く被り、上下は普通のスポーツウェア。練習場の空気に馴染むよう、目立たぬ格好を心がけている。ヒールもマイクも、この仕事には向かない。

女子大生のスイングをじっと見ていた初老のゴルファーが、ドライバーを手にしたままゆっくり近づこうとしている。その首筋から、薄紫色の靄が立ち上るのを見逃さない。出た、思念体だ。

深呼吸して息を整え、靄を凝視する。集中力を高めるため、手で印を結ぶ。やがて靄の中から複数の口が現れ、次々に言葉を発していく。もちろん、この場でそれを聴くことができるのは私だけだ。

「もつと力を抜いて」「フォームが乱れないように」「良かつたらこの後でお茶でも」：思念体から漏れ出す様々な声に対し、私は討魔の呪文を唱える。中身は即興だ。「参考になります」「すごいですね」「今度またぜひ」…一つ一つの言葉に相槌を打っていくと、靄の中の口は閉じられ、やがて空気の中に散っていく。完全に紫色の思念体が消えると、初老のゴルファーはドライバーを両手で掴んで背筋を伸ばし、何も言わずに元の場所へ帰つていった。「討魔完了」私は小さく呟いて、次の教え魔を見張る。

「凪ちゃんありがとうね、今日も平和だった」

よく日に焼けたセンター長が笑顔を見せる。このゴルフ練習場とは長い付き合いだ。教え魔ハンターの契約をしてもう五年になる。こういう施設にとつて教え魔の存在はとても厄介だ。教えられる側にとつては、不要なコーチングはありがた迷惑。かといって教える側も、たいてい悪気はない。だから「声掛け禁止」などを命ずると怒り出してしまうこともある。その結果、双方のお客さんが離れてしまうことになりかねない。そんな時こそ教え魔ハンターの出番だ。角が立たないように、教え魔の思念だけを消し去ることができる。全国でも数十人のこの職業、今じわじわと需要が伸びている。

「ハニートーストのアイス乗せでござります」

分厚い二切れのパンとバニラアイスのてんこ盛りに、蜂蜜がたっぷりと注がれている。教

第22回坊っちゃん文学賞 佳作 「教え魔ハンター」 青乃家

え魔ハンターはとにかく精神力を使うので、仕事が多い日はこうやって喫茶店で「要塞のような朝食」を摂る必要があるのだ。かすかなシナモンの香りが食欲をそそる。しかしナイフとフォークを構えたその瞬間に、スマホがぶるぶると振動して着信を知らせた。

「水口さん、お疲れ様です。本日十三時から元町カルチャーセンター、行けます?」

斡旋所の吉永さんだ。受講者に不審な声掛けを行っている老人がどうやらこの時間に現れるらしい。人手が足りないので、ちょっと遠い場所だが私に仕事が回ってきた。

「いいですよ。画廊の仕事が終わったらそちらに急行します」

「ごめんなさいね、よろしく」

私は電話を切ると、アイスのやや溶けかかったハニートーストに急いで齧りついた。我ながらよく頑張っていると思う。「見えて」しまるのだから仕方がない。人と人の適正な距離を保つため、教え魔の邪念を討つ。それが私の仕事だ。

午前中の画廊での相手は案外手強かった。若手の女性画家が本人在廊で個展を開いているのだが、どうやら教えたがりの美術ファンが多いようだ。会場スタッフのフリをした私は次から次へと現れる思念体を討つていった。

「素敵ですね。セザンヌのようだ」

「ありがとうございます」

にこやかなやり取りが交わされているが、実際にはその一言の裏で、私はおよそ十倍もの言葉を未然に討つている。ギャラリーストーカーというのだろうか。ここにでも余計な干渉をして自己アピールをしたがる人間がいるものだ。

「ありがとうございました、お疲れでしょう」

「大丈夫です、仕事ですから」

画廊のオーナーに昼食へ誘われたが、次のカルチャーセンターへ急がねばならない。私は丁寧に断ると、駆け足で駅へ向かった。

「あちらのご老人です。窓際の…」

カルチャーセンターの職員さんに聞くところによると、ここ最近になつて施設に姿を見せるようになつた男性とのことだった。見たところ七十代の半ばくらいで、ハンチング帽に杖を持っている。眼鏡の奥の目はやや虚ろだ。

私は老人が目視できる位置で思念体が出現するのを待つた。コーラスの講座が終わったようで、教室から出てきた中年の婦人が一人、老人の隣に腰掛けてお喋りを始める。出た、思念体だ。

しかし、一見して私は目を疑つた。赤いのだ。普段は紫や黒、濃い群青などの教え魔の思念体が、真っ赤に燃え盛つていて。こんな色に出くわしたことは今まで一度もない。

だが、怯んではいられない。私は印を結んで心の声を探ろうとした。だが、何も浮かんでこない。教えたいのに、教えるのがつらい——そんな心の葛藤が言葉そのものに防御壁を張り巡らせ、討魔の手段が通用しないのだ。こんなことは初めてだった。手に汗が滲む。教え

魔に負けたことなどないのに。しかし、どんなに神経を研ぎ澄ましても、私の討魔の術は老人に通用しなかった。

「すみません、少しお伺いしたいのですが」
中年女性二人と無理に雑談を始めようとしていた老人に、私は割って入った。教え魔本人と接触するのは、ハンターにとって一つの屈辱である。しかし、私はどうしてもあの赤い思念体の正体を突き止めたくなったのだ。

私は老人に囮募講座はここにあるのかと、適当な話を振つてみた。「ない」という単純な返答ではなく、当然ながら老人は饒舌に語り始める。女性が囮募をやるなんて珍しいという話から、いやプロには女性も多いと訂正が入り、話は全く別の方向へ飛ぶ。昨日ドジャースの大谷選手が満塁ホームランを打つことや、バスの料金の値上げに反対することなどを次々とまくし立てる。

違う。赤い思念体の内実がこんなものであるはずがない。老人が語りたいのに語れないものが何なのか、私は丹念に探つていった。

「そうじゃ、あんた知つとるかのう」

昔のことには話が及んだ際に、老人の目に光とも涙ともつかないものが浮かんだ。三十年前の集中豪雨。市のほとんどを洪水が飲み込み、山際では土石流で多くの犠牲者が出了。そこに話が移つた途端に、老人は堰を切つたように語り始めた。

「避難所の様子がねえ、忘れられんのよ。まだ若かつたからね。皆を励まそうとしたけど、逆に怒られたりしてね。辛かったね」

老人の口は止まらなかつた。高まる不安、泣く子どもたち、分け合つた避難食、自分の家の惨憺たる有り様、土砂やゴミを片付ける際の悪臭と疲労、行政への願い…。語りたかつたこと、教えていたことが次々と溢れた。

実を言うと私の父も、その災害で亡くなつてゐる。幼い私と母を家から逃がした後で、家財を取りに行って土石流に呑まれたのだ。私は記憶のあやふやな父の輪郭をなんとかはつきりさせたくて、遺品を何度も何度も触つた。伝えられなかつた思いが残つていなか、蔵書や日記を読み込んだ。私に人の心が思念体となつて見えるようになったのは、そうしたことを受けた数年後だったようだ。

『平成〇〇年豪雨を語り継ぐ会』が開かれたのは二ヶ月後のことだった。カルチャーセンターレに集まつた十数人はそれぞれの体験を思い思いに語つていく。私があの日に思念体と戦つた老人は森田さんというらしい。呼びかけ人としてこの会の代表を務めてもらつた。

「災害の恐ろしさと、そして人間の絆がどれだけ大切か、次の世代に教えて、伝えていくことが大事だと私は思います」

会に集まつた人それぞれが抱えていた赤い思念体が、語り終える度に薄くなつて消えて

いく。私が討つ必要はどこにもなかった。また来年会いましょうという言葉とともに、会は穏やかに幕を閉じた。森田さんも、他の参加者も、語れなかつたことを語る」とができたと、いう安堵の色が目に滲んでいた。それは、私も同じ気持ちだった。

本格的な秋が訪れた。涼しくなったキャンプ場には初心者キャンパーが多く、私は教え魔に目を光らせている。特に女性のソロキャンパーは格好の標的だ。新品のマウンテンジャケットを着た若い女性が火を起こすのに手間取っていた。ずっとそれを遠くから見ていた中年男性の背後に、深緑色の思念体が出現する。

「ちょっと貸してごらん」「初心者? コツがあるんだよ」「女の子一人で怖くない?」：私は印を結んで魔を討つ。「わあ、お上手ですね!」「ベテランですか? 格好いいです」「頼もしいですねえ」：思念体は霧散し、男性は素通りしてトイレに向かう。女性はやつと付いた火に目を輝かせた。

ぴしゃりと腕を叩く。十月だというのに、思念体よりも蚊が厄介だ。さつきから三箇所も噛まれている。この仕事が終わったら、長い休暇を取つて海外でも行こうかしら。

私は教え魔ハンター水口凪沙。でも、全部が「退治」つてわけでもない。お彼岸にお墓参りしたばかりだけど、私は今でも、父に何かを教わりたい。

(終)